

ロジットログリニア分析で訪問指導によるADL自立度に対する効果の程度をみた結果、訪問指導を実施した場合、実施しない時に比べて3.89倍、ADL自立度が向上したことが示された(表4)。

表4 ロジットログリニア分析結果

モデル	オッズ比 (95%CI*)	標準誤差	Z	適合度	
				Entropy	Concentration
[介入群] [BI得点向上]	3.89 (0.98~15.49)	0.7057	1.93	0.049	0.063

* confidence interval.

IV. 考察

本研究結果から、過疎地において、PTを含む保健福祉の専門職による訪問指導により対象者のADL自立度が向上する可能性が示された。筆者らは、ADL自立度と心理要因との双方向因果関係²⁾、および環境要因が心理要因とADL自立度に及ぼす影響³⁾を報告しており、今回月1回程度の訪問頻度であったものの、ADL自立度にこれらの因果関係が関与したことも推察される。一方、家族関係は訪問指導によって改善したとはいえないものの、介入群で初回より2回目得点が有意に高く、BI得点との中程度の相関を示したことから、訪問指導以外の何らかの要因が家族関係の向上に寄与した可能性も考えられる。

V. 文献

1. 伊藤日出男, 山本春江, 他: あすの地域保健福祉の充実に向けて—過疎地域での在宅障害者訪問指導・ケアマネジメントの実践報告—. 青森県立保健大学健康科学特別研究—ケアマネジメントの地域実践計画と教育方法改善のための研究報告書(平成11~13年度). (編) 伊藤日出男, 盛田寛明, 2002.
2. 盛田寛明, 塩中雅博, 他: 在宅高齢脳卒中片麻痺者の「できるADL」と「しているADL」の差と意欲・自己効力感との双方向因果分析—構造方程式モデルを用いて—. 保健の科学, 44(9), 727-733, 2002.
3. 盛田寛明, 塩中雅博, 他: 在宅高齢脳卒中片麻痺者の「できるADL」と「しているADL」の差に影響する心理・環境要因—構造方程式モデルによる分析—. 総合リハ, 31(2), 167-174, 2002.

ポスター7

スポーツ外傷予防に関する取り組み —1999年から2002年までの活動報告—

三浦 雅史¹⁾ 川口 徹¹⁾ 尾田 敦²⁾
長谷川 至²⁾ 佐井川匠秀³⁾

1) 青森県立保健大学 2) 弘前大学医学部保健学科

3) 芙蓉会村上病院

Key Words : ①予防 ②メディカルチェック ③活動報告

I. 目的

近年スポーツ人口増加に伴い、スポーツ外傷件数も増加していることは周知の事実であり、理学療法分野においてもスポーツ外傷に対する社会的ニーズは増加している。本邦におけるスポーツ理学療法の歴史を紐解くと、1970年代にスタートし、現在まで多くの研究がなされている。これら先行研究ではスポーツ外傷、特に術後の理学療法に重点が置かれている。また、最近では国内・外大会のアスレティックトレーナーとしての帯同報告・研究なども多く、スポーツ理学療法の対象範囲も拡がりをみせている。一方、これら先行研究ではスポーツ外傷予防という観点からの研究が必ずしも多くはない。スポーツ外傷予防のためにはメディカルチェックが重要であり、国際大会への参加やプロスポーツ契約のためにメディカルチェックをパスしなければならないことから、メディカルチェックの重要性が伺える。また、メディカルチェックは外傷予防のための基礎データとなるばかりではなく、競技力向上という観点からもアスリートにとっては有益な情報となる。

本研究では1999年から2002年までの4年間、本学において実施されたメディカルチェックについて紹介し、現状での問題点、今後の展望について報告する。

II. 活動方法

本研究は大学、高校において競技スポーツを行っている運動部もしくは青森県の各競技団体を対象とし、研究の趣旨を説明し、同意の得られたものに参加を募った。その上で、本学を会場にメディカルチェックを実施した。

1. メディカルチェックの内容

- a. 最大酸素摂取量の測定: 全身持久力の指標である最大酸素摂取量を呼気ガス分析機を用いて測定した。
- b. 体脂肪測定: インピーダンス法にもとづく測定機による体脂肪を測定した。今回使用した体脂肪計は体幹および四肢の分節した体脂肪を測定することが可能である。

- c. 下肢および体幹アライメント測定:女子学生では特に問題とされる下肢アライメントを中心に測定した。また、staticのみならずDynamic(特にランニング)アライメントについても測定した。
- d. 四肢計測:下肢長、下腿長など。また、大腿および下腿部などの周径測定。
- e. 等速性筋力測定:上肢、下肢、体幹の筋力測定を実施した。また、筋力のみならず角速度特性についても検討した。
- f. 体力測定:垂直跳、立ち幅跳などのジャンプ能力の検査。シャトルランなどの検査。その他、一般的な体力測定を実施した。
- g. スポーツ外傷の既往歴、現病歴。また、受傷後の対応方法についても調査した。

2. メディカルチェックのフィードバック

メディカルチェックの結果については個人もしくは団体に、書面もしくは口頭での報告を行った。書面で報告を行う場合は、データだけではなく、データの解釈や全国平均などとの比較についても報告した。また、異常と考えられる所見についてはその対処についても言及した。口頭での報告の場合は、講義形式で選手全体にデータの意味や解釈を説明した。また、異常所見があるものには個別にその対処についてアドバイスを行った。

Ⅲ. 結果

1. メディカルチェックを受けた実数

1999年度は15名(男14名、女1名)、2000年度は55名(男47名、女8名)、2001年度は75名(男68名、女7名)、2002年度は75名(男63名、女12名)、計220名(男192名、女28名)がメディカルチェックを受けた。

2. メディカルチェックを受けた競技

本研究に参加した競技は野球78名、ハンドボール54名、柔道44名、陸上36名、スキー(アルペン、クロスカントリー)5名、卓球3名、計6競技であった。

3. メディカルチェックを受けた年代および競技レベル

本研究に参加したスキー、卓球については大学生であり、それ以外はすべて高校生であった。また、競技レベルとしては、いずれも青森県内のトップレベルの選手であり、全体の4分の1の選手が全国トップレベル(おおよそベスト8)の選手であった。

Ⅳ. 考察・結語

4年間にわたるメディカルチェックの活動実績について報告した。4年間の活動実績から1年間におおよそ50名の選手についてメディカルチェックを実践できたこととなる。

特徴的な傾向として、女子選手が少ない点である。こ

の点は、競技人口の男女差によることも原因と考えられるが、今回対象とした競技において野球、柔道など女子選手が少ない競技の選手数が多かったことに起因するのではないかと考える。一般に、女子選手は男子選手と比較し、特異的なマルアライメントを有することや筋力面での不利もあり、メディカルチェックは男子選手以上に重要となり、今後活動する上での課題といえる。

メディカルチェックを受けた競技については、今回6競技にとどまった。現在、青森県体育協会に加盟している団体数は60弱であり、今後、対象となる競技数を増やすよう働きかけることが重要ではないかと考える。また、対象となった選手のほとんどが高校生であった。この傾向は、本県の競技スポーツの中心が高校生であることを物語っているが、外傷予防という観点からは高校生のみならず、小・中学生といった成長期の選手に対する活動も視野に入れるべきではないかと考えている。

今回の活動を通し、今後の課題として検討すべきもつとも重要な点は、本活動が本当にスポーツ外傷予防に役立ったかどうかということである。この点については、どのような方法が良いか、今後十分に吟味しながら取り組んでいきたいと考えている。

本研究の一部は、平成11年青森県立保健大学健康科学特別研究(地域研究、奨励研究)、平成13年青森県立保健大学健康科学特別研究(奨励研究)の助成のもと実施された。

ポスター8

部分的な温浴と交代浴が 心血管反応に及ぼす影響 -身体組成からの考察-

李 相潤¹⁾ 盛田 寛明¹⁾ 福田 道隆¹⁾
勘林 秀行¹⁾ 金沢 善智²⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部理学療法学科

2) 弘前大学医学部理学療法学科

Key Words : ①部分温浴 ②部分交代浴 ③心血管反応
④交叉性効果 ⑤身体組成

I. はじめに

交叉性効果とは加温部位が熱による細胞組織の破壊を防ぐために、細胞血管が拡張して血液循環を活性化し、全身の至るところに熱が拡散するという循環系の原理を用いたもので、その熱効果については多くの先行研究で報告されている。しかし、加齢にともなう生理的な機能